百々裏話（26）

おもて　あきら

【宝山寺文書について】

奈良県生駒町の宝山寺は、真言律宗の本山であり（総本山は西大寺）、聖天様の名で関西の人々に親しまれている寺であるが、そこに世阿弥自筆の文書を初めとする多数の能楽関係文書が所蔵されていることは、学界衆知の事実である。しかし、それらの文書が宝山寺に蔵されるにいたった時期や由来は必ずしも明らかではなく、文書の量的規模についてもよくは知られていないようである。昨年十一月に宝山寺で開かれた中世文学会主催の展観に際しても、多くの人々から右の点についての質問を受けた。この小論に於いてもしばしば宝山寺文書を引用しているので、この際私の知っている範囲のことを書いて置きたい。

宝山寺の能楽関係文書は、すべて金春家に伝来したものである。金春家といっても、金春大夫家のほかに、尾州徳川藩のお抱えだった金春八左衛門家や、主として仙台伊達家に仕えた大蔵庄左衛門家、加賀前田家に仕えた竹田権兵衛家などの別家や分家があったが、宝山寺文書は、金春大夫家伝来本と金春八左衛門家伝来本とが大半を占め、量的にはそう多くないが竹田権兵衛家の分も合流しているものと認められる。大蔵大夫家の伝来本は入っていない。金春大夫家・八左衛門家・竹田家の間には、幕末まで相互に養子相続などの形で交流があって、三家は血筋の面からも関係が深かった。明治維新後に個々の家として芸事を継続し得なくなった際に、すべての文書が大夫家に集められる結果となったのであろう。そうして集まった文書の大半が、明治年間に宝山寺へ移されたわけである。

金春家文書が宝山寺へ移った事情については、昭和十六年にこの文書を発見された川瀬一馬博士が、『世阿弥自筆伝書集』の〃巻後に〃の項で、

> 駒岡氏（前宝山寺管長）の先師は金春家の出で、兄弟の大夫の為に力を致し、其の関係で伝書類なども預ってゐたものであるといふ。

と説明しておられる。もう少し詳しく説明し直すと次のような事情である。幕末の金春大夫は、八左衛門家から本家に養子入した八郎広成（ひろしげ）である。養父が金春大夫元照、実父が八左衛門安茂、義理の叔父が竹田権兵衛安居であった。彼が本家を相続した頃、すでに金春家と宝山寺との間には何らかの関係があった（単なる信仰関係か縁戚関係かは不明）ことが知られるが、そうしたことから、広成の三男は幼年にして宝山寺に入り、出家して隆範と称した。明治二十九年に広成が歿して後を嗣いだ八郎（武三）儀広は隆範の弟である。弟が嗣いだ金春宗家は、幕末に既に数千両に上る借財があった上に、維新直後には領地内に発行していた私製紙幣（金春札）の取立ても加わって疲蔽のドン底にあった。一方、兄の隆範が後には管長となった宝山寺は、関西でも有数の裕福な寺であった。弟がしばしば兄のところへ無心に赴き、そのつど兄が困惑していた由を、現宝山寺管長松本実道氏も伝え聞いておられるとのことであった。広成は謹厳実直を以て聞え、明治能楽界の君子人と称された人であったから、子の隆範に迷惑をかけることも少なかったであろうが、武三は大酒呑として逸話の多い人物である。隆範の蒙った迷惑は並一通りのものではなかったことであろう。しかし隆範にとっては、金春家が自己の生家であるということ以外に、自分の隠し子を弟の武三の養子にしていたという弱味もあったために、金春家の面倒を見ないわけにはゆかなかったものらしい。金春家の文書

が宝山寺へ移ったのも、そうした事情が背景にあってのことなのである。

ただし、金春家文書は、借金の抵当として宝山寺へ移ったのではないらしい。なぜなら宝山寺文書の中には確かに抵当としての価値のある貴重な書物も含まれてはいるが、より多くは、ほとんど金銭的価値のない雑文書である。昔の借金の証文や領収書、商店の広告の類、名も知れぬ人からの時候の挨拶だけの手紙等々、実に雑多な内容であり、金春家にあった文書を、金銭的価値とは無関係に運び込んだ形である。

想像をめぐらすに、金春宗家の武三が酒呑みであり、家伝の書物を売り払って酒代に代えることもやりかねない状態であったので、兄の隆範が伝書の散佚によって家芸の退転することを恐れ、何かの口実を設けて家伝の文書を宝山寺で保管する形にしたものではなかろうか。武三が書物を一部散佚させていたらしいことは、武三と近づきがあったことの確かな他家に、金春家伝来本に相違ないと思われる書物が所蔵されている事実からも推測される。隆範が弟に金を貸すとは言っても、寺の金であるから、形だけでも抵当をとっておかねばならず、金銭的価値とは無関係に文書を預かったという場合も考えられよう。

ところでその時期であるが、武三が金春大夫であった明治二十九年から卅九年までの十年間のことで、隆範が宝山寺管長となっていた間のことと推測される。今メモが見当たらないが、隆範が管長になったのは三十五・六年の頃であったように聞いている。武三の歿後に、金春宗家の継承者として選ばれたのは七郎広運であるが、彼は広成の養父の元照の実子であり、武三とは血のつながりが薄かった。血縁の薄い広運へ伝書を譲ることを嫌って、宗家宅の文書を宝山寺へ移したということもあり得ないことではないが、広運継承の際にゴタゴタがあったという話は聞かないから、考えに入れないでよいであろう。明治三十年代の後半に、武三と隆範氏の兄弟関係がもとで金春家文書が宝山寺へ移管されたものと考えて大過あるまい。

だが、金春家文書のすべてが宝山寺へ移ったわけではない。金春宗家にも多数の文書が残されたのである。世阿弥や禅竹関係の伝書についてみても、金春大夫家伝来本の大半と八左衛門家伝来本の一部が宝山寺へ移り、大夫家本の一部と八左衛門家本の大半とが金春家に残された感じである。宝山寺文書を調査して第一に感じたことは、型付や装束付などの詳しいもの、つまり能役者にとって最も実用的価値の高い本が少ないことであった。それらはほとんど金春家に残されたのである。そうした点からは、宝山寺へ移すに際して、当座に必要なものだけは残しておくという、最低限の選択はなされたものらしい。ただ、実用的でもない文書で、昔は一群であったことの確かな本が、一部は宝山寺に、一部は金春家にと分れている例も多く、たまたま別の場所にあったというような偶然的な事情によるものもあるようである。八左衛門家が明治中期までは芸事を継承していたということも影響しているかも知れない。

宝山寺文書の目録は、七年ほど前に私が一年がかりで作成し、宝山寺と法政大学能楽研究所の両方に置いてある。全容を知りたい方はその目録を参照していただきたい。目録作成後に見つかった書物も少々あるので、それらを増補した上で、ガリ版刷りででも配布したいものと思っているが、ここしばらくは実現しそうもないようである。

（39・1・14）